

---

# 我が家物語

naoki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我が家物語

### 【Nコード】

N2686C

### 【作者名】

naoki

### 【あらすじ】

「我が家」は現在4人家族。私こと新島奈津ニイジマナツを筆頭に、女・男・女の三人兄弟。プラス、我が家の大黒柱、母ハハ。私と母と弟と妹。4人で始めた生活は9年目。それには訳があるけれど…。

## 1 第三次ゴキちゃん騒動

こんにちは、みなさん。今日は我が家について、お話ししたいと思います。

「我が家」は現在4人家族。私こと新島奈津ニイジマナツを筆頭に、女・男・女の三人兄弟。

プラス、我が家の大黒柱、母ハハがいます。

私と母と弟と妹。4人で始めた生活は9年目。それには訳があるけれど、お話しするのはまた後日。

今日は我が家の大事件、「第三次ゴキちゃん騒動」についてお話しします。

### 第三次ゴキちゃん騒動

もともとうちのアパートは、駅まで徒歩10分・家賃6万・スーパー近しという好条件だけで選んだ新居。

当然ながら、内装デザインその他にはハナから期待できないわけで、配水管だか薄い壁一枚だかで繋がった集合住宅では、常にゴキちゃんの脅威から逃れられないのであります。

「ギヤアアア！」

第三次ゴキちゃん騒動の幕開けは、弟こと健一ケンイチの悲鳴から始まった。言っておきますが、我が家は狭い。悲鳴と同時に、家中から「何だどうした」と残りの3人が走り出ます。

「何、どうしたの？」

「黒いアイツが出た！」

「黒いアイツ」。

「ハリー・ポッターにおける「例のあの人」のように、この単語は十中八九ゴキちゃんを指す。」

「まじか!？」

「え、どこどこ？」

私と母は既に戦闘態勢。ゴキちゃんは人類共通の敵であるからして、総員で退治に当たらねばならないわけです。

健一が言うには、「黒いアイツ」の発生源は健一と亜津子アツコの勉強部屋。しかも壁伝いに天井近くまで上っているという。

こういうとき、我が家で唯一の男であるはずの健一はまるで役に立たない。まるで駄目男っぷりを発揮する彼の代わり、仕方なく私と母が部屋を覗きこんだ。

「うつ…!!」

私は絶句した。何しろゴキ…いや黒いアイツは、勉強机のほぼ真上天井近くに這い登っている。こういうとき、人類は無力だ。唯一対抗できる手段と言えば…

「これ、届く？ 届きそう?。」

母がそう言つて、コックローチを差し出した。ちなみに母、この時点でゴキブリの位置がわかっていない。仕事から帰って即、コンタクトを外したためだ。

届く？と言われても、他に戦力がないのだから仕方あるまい。私は机を足がかりに、背伸びして天井にコックローチを吹いた。一発目の攻撃！

シュ      ！！

パタパタパタっ！！

「！？ ギャアアア！！」

「ウワアアア！」

「キヤーッキヤーッ！！」

あろうことが、黒いアイツは宙を飛んで我々に襲い掛かってきた！阿鼻叫喚…一瞬にしてパニックになる一同。しかしさすがの大黒柱、母は敵の逃亡先から裸眼の視線を外さなかった。

「いた、あそこっ」

「母パス！」

親子の連携でコックローチを手渡すと、母は地面を這い蹲るゴキに更なる攻撃を繰り返した。

シュー！！

シュー！！

シュ      ！！

……

……

…シュ ……！！

さ、さすが母。抜かりないな。

母親の雄姿を見せ付けて、すっかり母はゴキを退治した。

こうしてこの度のゴキ退治は無事終わったわけだが…実はこのゴキちゃんという生物、我が家に出現するのは三度目である。

そんなわけで、我が家ではゴキブリ対策臨時の家族会議が始まってしまった。

「ゴキブリって何で出るのかなあ…何とかならないのかなア」

健一…何とかなるんなら、世界中の人類が何とかしている。

「そういえば、ココ来て一年目くらいにも出たよね、ゴキ」

「そうだった？　しばらくでなかったんじゃないっけ？」

母はすつとぼけてそんなことを言うが、私と健一はしっかり覚えている。

今の「我が家」に移ってから一年目、ある朝ダイニングに出てみると、薄暗い中にゴキちゃんがいたのを。

その後すぐにホイホイを設置したので、またしばらく現れることがなかったのだ。

最後に目撃したのは、ちょうど一年くらい前。そう考えると、今回で三度目の「ゴキちゃん騒動」となる。

「またホイホイ買っ？」と健一。

「アレ、中身確認しなきゃいけないでしょ？ あれが何かねえ、やなんだよねえ…」と母。

「何かヤダよ俺。今こうしてる間にも、ゴキがどっかにいるかと思うと」と健一。

「お前ねー、寝る前にゴキゴキ言っなよー。寝れなくなるだろー」と私。

「すっかり眼さえちゃったよね」と母。

こうして、ゴキ談義の夜は更けていく。

…ちなみにこの時、深夜一時。

我が家は大抵、夜中の家族会議で大事なことを話し合う。笑い混じりの家族会議、そしてそこでは大抵何も決まらない。

決まらないまま、笑いですべてが終わってしまう。ここには何かを強引に進めようとする人間や、放任する人間はいない。

それが我が家。うちの家族。10年前から出来上がった、新しい新島家のすがただ。

この日の夜も、ホイホイを置くかホウ酸団子を置くか、結局決まらずに終わったのだった。

## 2 一生に一度の夜逃げ作戦（前書き）

「我が家」は私こと新島奈津<sup>ニイジマナツ</sup>を筆頭に、女・男・女の三人兄弟、そして我が家の大黒柱である母<sup>ハハ</sup>の四人家族。「我が家」が四人家族になった訳は…。



## 2 一生に一度の夜逃げ作戦

こんにちは、みなさん。今日もまた我が家について、お話ししたいと思います。

再確認ですが、「我が家」は現在4人家族。私こと新島奈津ニイジマナツを筆頭に、女・男・女の三人兄弟。

くどいようですがそれに加え、我が家の大黒柱である母ハハがいます。

私と母と弟と妹。4人で始めた生活は9年目。それには訳があるのですが…

今日はその理由について、さわりだけちょこっとお話ししましょう。

### 一生に一度の夜逃げ作戦

小学生の頃、よくこんな会話を友だち同士で交わした記憶がある。

「ネエネエ、ナツちゃんのお父さんとお母さんって、どんな？」

「えー？ んーとね、よくケンカしてるかなあ」

「ホント？ うちのお父さんとお母さんも、ときどきケンカしてるようー」

子ども同士の、実に無邪気な会話である。

唯一無邪気でないのは、うちの「ケンカ」はそんじょそこらの「ケ

ンカ」ではなく、おそろしくシビアな「ケンカ」だったという点だ。要するに、今で言うDV。

DVDじゃないよ、DVですよ。ドメスティックバイオレンス、要するに夫の家庭内暴力ということですね。

9年以上経った今だから陽気にこんなこと言えますが、当時はとてもシビアだった。シビアかつ、シリアスであつた。筆舌に尽くしがたい感じがあつた。

気づけば家にはそれがあり、生活の一部になっていたわけで。

けれど私と、小学生だった健一ケンイチと亜津子アソコにとって父は脅威ではなく、母にとってのみの脅威だった。

私が中学3年生になったある日だった。母が私を呼んで言った。

「奈津、お姉ちゃん。母さん、うちを出ようと思う」

母は私を「お姉ちゃん」と呼んでいた。単純に、私が三人の子どもの中で年長だったからだ。

「お姉ちゃんはもう大きいから、自分で選んでいいよ。家に残るのと、母さんと一緒に来るのと、どっちがいい？」

中学3年生にして、私はいわゆる究極の選択を与えられた。けど、答えは決まっていたので、私は即座に答えた。

「母さんについてく」

…実に、…実に、シビアな話だが、…

別にほのぼのとか心温まるとか、そういう理由ではなく、私は単純に、ひたすらシビアに損得勘定をしていた。

この当時母は既に家を出て仕事をしており、飲んだくれのしょーも

ない父よりよほど経済力があつた。しつかりした考えと知識と人脈があつて、ただの専業主婦ではなかった母が、先の見通しもなく別居するはずはない。アパートも新しい職場も車も、健一と亜津子の転校先まで、母はちゃんと用意していた。

数日後の夜中、私と母と健一と亜津子は夜逃げした。

一生に一度の夜逃げだ。軽自動車に乗って一時間と少し、荷物は既に貸しトラックに預けてあるから身軽なもの。ハイキングに行く手軽さで、私たちは家を出た。

「……………」

母は終始無言だった。私は窓の外を見ていた。健一と亜津子はまだ寝ていた。

実にシビアで、シリアスで、筆舌に尽くしがたい夜だったけど、私はひとつのことしか考えてなかった。

中学3年生の脳みそでは、父親がいなくなるというのがどういふことか、いまいち理解できなかったのかもしれない。だから私はただ、あんな父なんかクソくらえだぞ、いなくなつていいぞ、代わりに私が親父になるぞ、と、訳の判らないことをぐるぐる考えていた。

だって、奈津はお姉ちゃんだから。

健一と亜津子と母のお姉ちゃんなんだから、だから大丈夫なんだ。

そうしてひとつの夜を越えて、私たちは新しい家族になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2686c/>

---

我が家物語

2010年11月16日08時34分発行